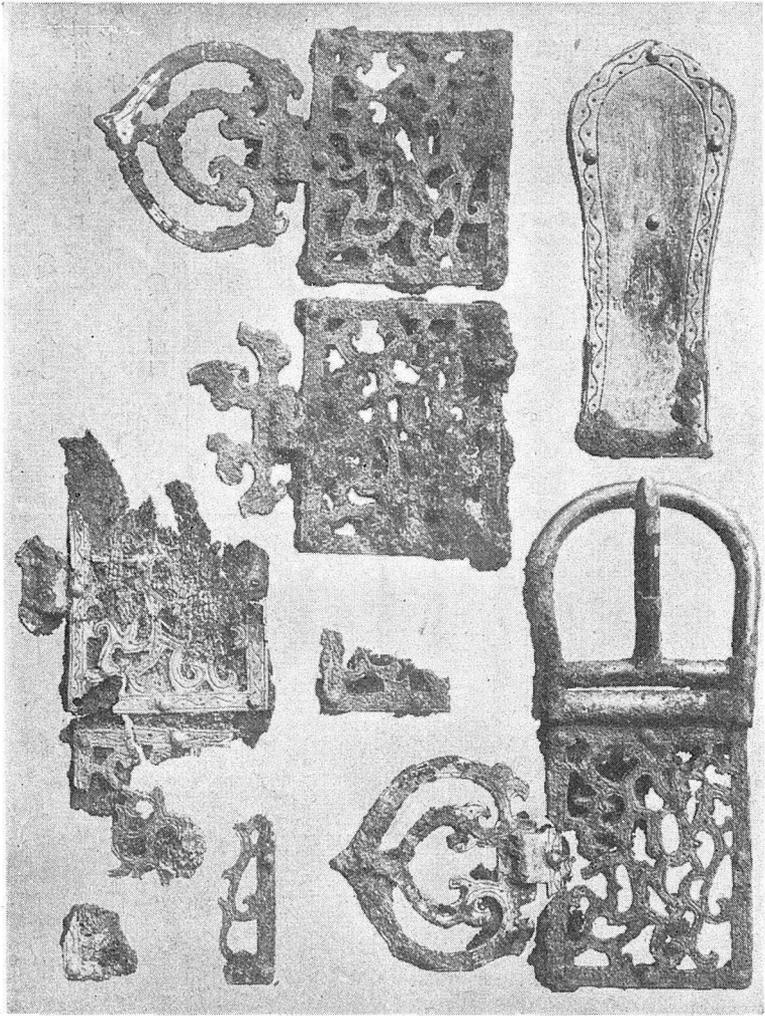


金銅製 鎧褌金具

堺市南郊七瀬古墳より出土したものであるが、鉸具・尾端金具・鎧板及垂飾の各部が殘存し、鎧板の裏面には麻布の附着したのが見える。(樋口氏論文参照)



東亞に於ける鈔帶金具とその文化的意義

樋 口 隆 康

梗概 中國六朝期に於ける東亞諸地域の古墳から出土の鈔帶と稱する一種の革帶に透彫文様の金屬板を飾付けた帶金具は、所謂胡族の風として古代北方文化圈にその源を有する特色の著しきものであるが、それを一文化要素として眺めるとき幾多の興味ある問題を提出してくれる。即ち北方より先ず中國に流れ入ったとき、その高度に發達した漢文化に接して大きく變貌をとげた。然しその變化の對象は器自體の本質ではなくて、加飾文様であつた。ハンガリー出土品にみるスキタイ的動物文に相通した中國的龍文が、こゝでは盛行した。所がこれが朝鮮に入つては又別な方向への發展が行われ、東海の孤島日本に至つては、大陸の製品をそのまま愛用し、自らの個性を何等加えることがなかつた。この受容れ方の相違こそ、當時の三地域文化の性格を明示するものであり、その變遷過程の中には文化傳播及借用の法則を知ることが出来るのである。

一、まえがき

終戦後の數年間吾々は各地で破壊された遺蹟の殘骸調査を行つたが、その中の一つ堺市南郊の履中天皇陵陪家と思われる七觀古墳から金色燦然たる一條の鈔帶を發掘した。

頑丈な作りの鉸具や鮮麗な形の尾端金具と共に革帶面に相接して取附けられた二十數個の護板とその垂飾は、作柄の精巧と龍文の優秀さが一見して海を越えた大陸の文物であることを思わせるものがあつた。一體この種帶金具は我國

東亞に於ける鈔帶金具とその文化的意義(樋口)

でも既に十數ヶ所の出土例があり、朝鮮では新羅に於て最も著しく、百濟・高句麗・中國を経て遠く古代北方の狩獵民族文化の中に源流を求めうるものなのである。而してこれに對する先學の研究も早くより行われて相當の成果を擧げている。即ち最も早くこれの綜合的考證を試みられたのは高橋健自博士^①であつて、我國上代遺物の中にみられる文物の一つとして取上げ、形式を分類し出土地を擧げ、類似の金具が中央アジアを経てトルコ、ハンガリーまで分布することを指摘して、その起源を胡人の服飾に求められていて大體の性質は明かにせられてゐるといつてゐる。次いで大正の後半から行われた新羅古墳の學術的調査がこの種金具の多數の資料を齎し學者の關心を昂め、濱田博士は慶州金冠塚の報告書^②の中でこれを概説し、梅原博士亦大和新山古墳の報告^③に於て言及され、更に原田博士の支那服飾史に關する論文^④中にも簡單な記載がみられるのである。最も新しくこの遺物に關する一論を草されたのは齋藤忠氏^⑤で、高橋博士以後の新資料を加え、その出土遺跡の略説からこの問題に對する總括的論を進めておられる。従つて私

の如き淺學の更に附加すべき餘地もないものの如くではあるが、而も尙お敢てこゝに一文を草せんとするのは既往の研究の不備を補う意もさること乍ら、この小品の實際の在り方から人類文化の變遷の法則の一つを窺ひ出さんとする意圖に外ならぬ。一文化要素がある文化圏から他の文化圏へ傳播して行くとき、その兩文化圏の特殊關係や歴史的、社會的、文化的諸現象に基き常に違つた様相を呈するものであり、本遺物が北方狩獵民族の文化内に發生して東亞諸域に傳えられたとき、どのような變化が生じたかを眺めてみたい。その考證は又一文化遺物がそれ丈であるのではなく、他の文化要素との複合的關聯に於てその存在意義を有するのであり、それらとの有機的關係に於て歴史的に把握されねばならぬことを強調せんが爲である。以下鑄帶金具實物についての考察から論を進めて行くことにする。

註①「上代遺物より見たる大陸文化の輸入」（『考古學雜誌』十四ノ十五、大正十三年）

②「慶州金冠塚と其遺寶」朝鮮總督府古蹟調査特別報告第三册

③「佐味田新山古墳の研究」大正十年

④「支那唐代の服飾」大正十年

「漢六朝の服飾」昭和十二年

⑤「上代帯金具考」〔考古學雜誌〕廿一ノ六、昭和十六年

二、分 布

さて順序として出土遺蹟から始めることにするが、高橋齋藤兩氏の論文に地名表が出ていたので、重複を避け遺漏及その後の発見についてのみ述べると、吾國では從來知られてゐた十二ヶ所^⑥の他に大阪府南河内郡道明寺村澤田長持山古墳、大阪府堺市旭ヶ丘履中陵陪冢七觀古墳の二つが新資料として追加される。前者は允恭陵の西方にある小圓墳群（七ツ塚）の一つで古くより家形石棺二個が露出し、畫像鏡の出たことで知られてゐた。その後家形棺の一つの周圍を取り圍む堅穴式石室の内部が調査された際、挂甲・衝角付冑・馬具類等と共に鍔板の小破片が數個見出されたのである。第二の七觀古墳も既に一度發掘せられて出土遺物の報告も出てゐるが、その後遺跡が破壊されてあらわれた短甲の胴部をめぐつて一條の鍔帯が着裝のままの状態で遺

存してゐたことは、從來吾國の遺跡にない新知見を加えるものとして重視されるのである。

次に朝鮮半島に於ては南鮮に豊富にして、慶州の古墳では報告されてゐるものでも十二三墓を數え、特に戦後調査されたものとして後述の如く年代決定に重要な資料を提供した壺杆塚^⑦が附加される。更に大邱・昌寧・星州・高靈・梁山等の舊任那地方の古墳からも十數例、百濟の中都公州から三例、北の高句麗では平安南道高山里九號墳、湖南里四神塚から僅か三個ではあるが出てゐて、當時朝鮮の三國に通じて行われてゐたことがわかるのである。

更に中國に就いては出土品の知られたものが少く、確實な例としてあげられるのは廣州市西郊太刀山の晋代古墓の一例と、京大考古學教室の藏する二三品があるにすぎない。前者は塚中から重列式神獸鏡・弩機・陶器等と共に後述の帶金具が出土したが、本墳築造の專の中に紀年銘があり、これまた編年の上に重要資料となりうるのである。かくて北方胡族の服飾が東亞の全域にわたり普及してゐたことを知るのであり、單に異國の珍物という丈でなく

深く彼等の文化生活の中に食い入つていたのであり、その實態は次の考察によつて次第に明確化されるであらう。

（註）の高橋博士の地名表には奈良朝代のものが混つてゐるが、これは時代が下るのみでなく、文化的意義もかなり違つてくるので、齋藤氏の如く一應切離して考へるのが穩當と思われ、本論文では觸れない積りである。

② 長持山古墳については大阪府史蹟調査報告第五冊に石棺の寫眞があり、又明治十年壽象鏡出土の際の關係書類（同地松村吾一氏藏）をみると二つの漢式鏡、鈴劍等と共に長方形の帶金具の略圖が載せてある。新しく堅穴式石室が調査されたのは昭和廿一年十一月京大考古學教室員の手によつてである。

③ 末永雅雄「七觀古墳とその遺物」〔考古學雜誌〕廿三ノ五昭和八年）

三、形式分類

一體鍔帶とは革帶の一種で、一端には今日吾々の使用する鉸具と同じ鉸釧ヒョウシをつけ、他端には鉈尾クノビなる帶端金具があり、その間の帶の表面に鍔板を連接して附着せしめ各々に垂飾を懸けてゐるのであるが、その中最も特色のあるのは

鍔板及び垂飾であつて、多様な形態をとつてゐる。従つて鍔板の形式分類が一般に行はれるのであるが、之についても高橋・齋藤兩氏は一つの試みをなされてゐる。先づ高橋博士は簡單形にして實用的なものと、裝飾文様のある非實用的なもの二群に分け、前者が古制をおび、後者は時代の下の様式なることを一般概念として指摘された。然し簡單形の中に奈良朝代の小形長方形無文の類を含めてゐることや、實用非實用を鑲の實用性如何によつて區別してゐる爲心葉形鍔板に圓鑲を附するものを最古式としてあげてゐるのは、別に具體的根據に基いたわけではなく、簡單から複雑へというナイーヴな進化の法則によつたにすぎないといえる。次の齋藤氏は四型式に分類し、Ⅰ型式は心葉形座板の下方に圓鑲を附垂したもの（石川縣狐山古墳）、Ⅱ型式は長方の鍔板を主體とし内に文様をあらわしたものの（熊本縣船山古墳）、Ⅲ型式は唐草文の透彫方形座板に同じ透彫を有する鑲を附した式（樞山、月岡、新山三古墳）、Ⅳ型式鈴を垂下したもの（岡山縣茶臼山古墳、京都穀塚）としてゐる。然らば龍文の透しがあつて唐草透の垂飾と組合わされ

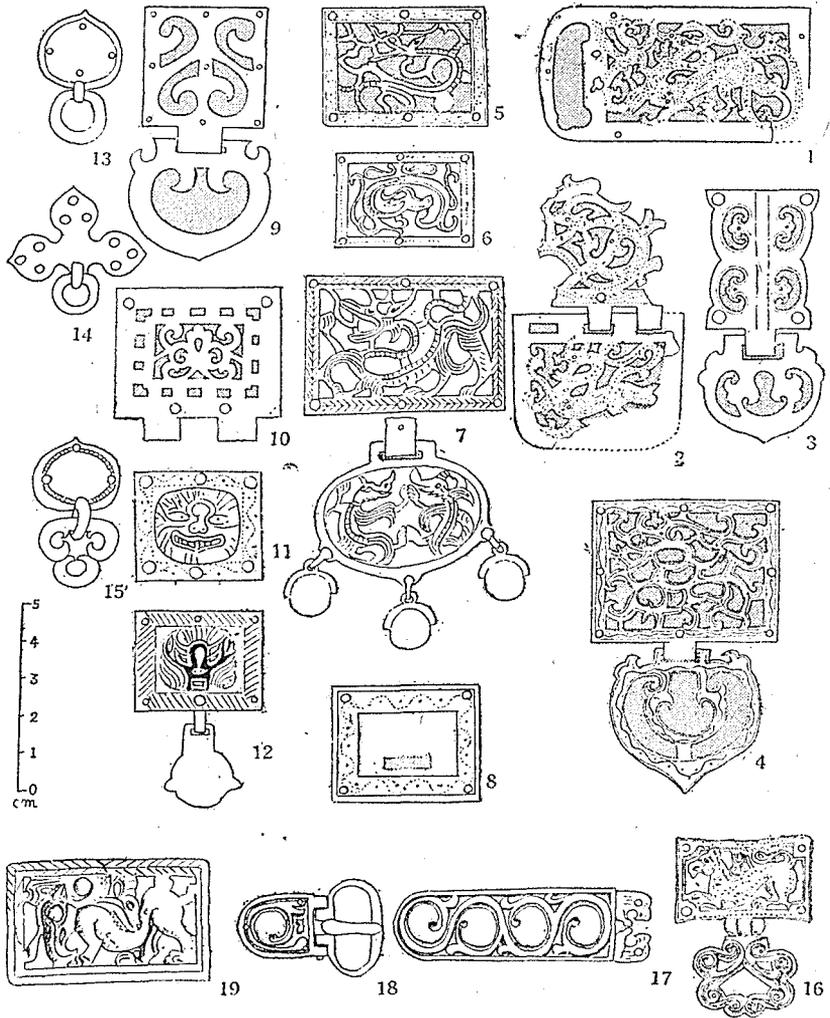
た七観古墳出土品の如きはどこに入れるのか不明であり、又公州宋山里及び高靈古墳出土の打出獸面ものはⅢ型式の岡山のものと同じであるにも拘らず別の作りのⅠ群に入れていることや、打出獸面と鑄出しの双獸文という文様手法全く異つたものを同じⅢ型に入れている等は承認し難く一般に龍文飾の類に對する分析が不充分の様に思われる。その上齋藤氏は分類した上で、その分類が如何なる意味をもつかについては一言も觸れてない。そこで私はこれ等の不備を正し、ナイーブな基準から進んで製作の技術なり施文の手法等を考慮に入れて新たな分類を試みてみた。

先ず銚板の外形から方形（又は長方形）のものと同心葉形のものに二分されるが、更に使用材の厚さから厚手（厚さ一〇・五耗）にして剛硬なものと、薄手（厚さ〇・二五耗以下）にして柔軟なものとがあり、更に夫々が製作手法施文法によつて細分される。今これ等を六型式に整理してみる。（第一図参照）

（A）型式：厚板金銅製にして外形は方形を原則とするが多少の變形をなすものあり。銚板の下邊中央に舌を造出

東亞に於ける銚帶金具とその文化的意義（樋口）

して裏面にまげ之に垂飾を懸ける。文様は龍文が多く、先ずハツリ（鑽の一種）をつかつて打抜き圓形の輪廓を取り、細部を小形ナメクリ（鑽の種類）によつて毛彫りで表わし、平面的表現ではあるが技術的には最も精巧なものである。^①京大所藏中國出土品（Z08）は一部破損して全形を明かにしないが國立博物館に藏する慶尙北道地龍城附近出土と傳えるものによつて外形が推され、座板に龍、垂板に虎を描き、流麗にして緻密な技法は誠に素晴らしい。これと同一帯の鉸具（Z01）と思われるものがやはり京大に存するが同じ手法で龍と鳳凰を彫出してあり、更にこの器が廣州大刀山出土品と器形文様を等しくするのは同一作者の製作と思われる位である。而もこれ等が四神を文様としている點に留意される。同じ手法の鉸具は奈良縣新山古墳からも出てゐる。（Z03）は三葉文を四個配し、兩側はその葉文の輪廓に應じて連弧状をなしており、垂飾亦三葉文から變化した唐草文を打抜透彫りにした心葉形のものである。之も同一手法のものが傳慶尙北道地龍城出土及び新山古墳出土品にある。次に七観古墳のもの（Z04）は横長方形板に



第一圖 帶形式分類圖

(1) 支那出土 京大藏品及
 (2) 支那出土 京大藏品
 (3) 支那出土
 (4) 堺市七瀬古墳出土
 (5) 愛知縣額田郡幸田村坂
 崎古墳出土
 (6) 熊本市玉名郡江田町船
 山古墳出土
 (7) 京都市松尾下山田被塚
 出土
 (8) 福岡縣浮羽郡千年村月
 岡古墳出土
 (9) 福岡縣飯塚市西町觀山
 古墳出土
 (10) 平安山里二號墳出土
 (11) 四神塚出土
 (12) 岡山縣邑久郡國府村牛
 文茶臼山古墳出土
 (13) 石川縣江沼郡勅使村二
 子塚山古墳出土
 (14) 慶州金冠塚出土
 (15) 同
 (16) Csuny (Ungarn)
 Strzygowsky
 Erzsébet (≈)
 (17) 同
 (18) 同
 (19) 同

同じ手法の龍文を描き、周縁には波状線とその波間に點を配した文様を繞らし、心葉形垂飾にも同じ圖文を飾つてゐるが、龍文自体はNo1, No2に比し細部の毛彫りが簡略化されている。福岡縣月岡古墳出土品にはこれと同様式のもの他に弧狀連繫文で飾つた品がある。長持山古墳出土のものとは長方形で龍を打抜いてゐるが裏に板を張つてゐる點がこの式では異例とする。

(B) 型式……金銅製厚手方形はAと同じだが、施文法が異なる。即ち打抜き透すか、又は鑄出して獸形を描き、細部には大形ナメクリを使う爲に薄肉彫風の肉がついて表わされる。これは技術的にはより劣るのである。愛知縣青塚(No5)のものは透しの儘でA式に近いが一般には京都穀塚(No7)如く裏張りして透しの儘に殘さないので本式の特色で江田船山(No6)及び福井縣西塚のも恐らく同一手法かと思われる。今一つA式と異なる點は下邊中央に垂飾を懸ける造り出しの舌がないことで、自然垂飾の有無が問題となつてくる。京都穀塚の場合、鈴付心葉形鑄出獸文の垂飾金具らしきもの(No7)が伴出し、その上端に二つ折に

通した蝶番金具が附屬してゐて鍔板中央下縁の裏面にうま填るのである。この手法はE型式にもあつて之を垂飾として差支えないようではあるが、外に例のないものであり穀塚の例が鍔板と文様手法を異にしている點や、この型式の他の出土地で全く垂飾を伴わない所から否定説も亦考えられる。周縁の文様は愛知縣青塚のが波狀列點文である他はいずれも綾杉文で、青塚のが透しのまゝの手法といふA式に近い趣をもつてゐることが留意されよう。

(C) 型式……金銅製厚板方形で周縁に波狀列點文の毛彫りのある所Aに共通するが、内部は全くの無文で長方形透孔を有するものがある。福岡縣月岡古墳、宇治山田市塚山古墳の二例が知られてゐるがこれが奈良時代の石帶と同一型式である點が注意される。

(D) 型式……薄手方形板に一種の忍冬唐草文様を打抜透彫りし、下邊中央に舌を出して裏面に曲げ同じ唐草透しの心葉形垂飾を釣る。我國では飯塚樞山の一例(No9)しかないが、朝鮮では最も優勢で文様にも變化が多い。平安南道湖南里四神塚(No10)の一例は同じ唐草文ではあるが、

他と類を異にする特殊なもので舌も二個ある。本型式の材質は銀が多く金・金銅製もある。

(E) 型式……金銅製薄手方形板の中央に獸首面を打出しによつて表わしてゐる。岡山縣奈臼山古墳(No12)のは獸口を閉じ、周縁に陰刻の斜線文があるが、公州宋山里二號墳(No11)のは獸口が開き、周縁は波状列點文の毛彫である。垂飾は岡山にのみ之を認め、小片を折曲げた鈎金具に鈴をつけ、板下辺中央の銜に裏側から取付けてをり京都穀塚のものに一致した特色をもつが、他の二例(公州、高靈兩古墳)にはこれがない。

(F) 型式……尖端を上にした逆心葉形という特殊形をなすが、この形が漢代に盛行した四葉座から來た事は、金冠塚出土品(No14)中に三葉を残すもの存することからも推定される。面に膨らみを加え三乃至四の銜を打つ外、No15のような連粒状の文様のある以外は素文である。下方に鈎形の舌を有して垂鐙を懸く。これにも素鐙の外に三弧連繋状のものがある。材質は石川縣孤山古墳(No13)の如き銀製が多く、その他金銅や鐵地銀張りもある。

以上の六種に分類した諸型式を通觀してみるとA式が製作技法最も優れ基本的特色を帯びてゐることが判り、他のB・C・D・Eの各型式は何等かの點でAと關聯する所あり、ひいてこれ等がAから派生したことを思わしめるのである。最後のF型式はAとは異なる特殊なもの如くに思われるが、その形が中國的四葉文から生れたとすれば、Aと同様中國に於て初めてその特色を備へたことになり、同じ文化圏の所産なることに又通じた點をみるのである。更に出土地の明かなものによると我國から至型式が出土してゐるのに對し朝鮮ではD・E・Fに限られ、中國はAのみである。しかも我國の諸例のうちにA・D・E・Fは全く大陸のものとして一致しており、B・Cは現在では吾國丈しか出てないが、Bの龍文は後述の如く、中國六朝のそれに一致し、C式又隋唐代の銜帶に通ずるものがあるのである。かくみると日本的特質は全然認められず總てが舶載品といつてよいようである。かくて大陸作品として、更に注意されるのは中國と朝鮮に於て明かに對照的なもののみとめられる事である。勿論廣大な中國の例が極めて少數であつ

て論據となり得ない怨みがあるが、少くも今日の資料ではその對立は明かである。朝鮮のD・E・F三型式がその中に中國的要素をみとめられはするものいずれも薄板造りで唐草文を飾り全體の作りは新羅に盛行した冠・履・耳飾等のフイリグリーの金工術に通ずるものがあり、純粹に中國的なA・B類と異質的である。然らば先にみた中國的要素は朝鮮が廣い意味の東亞文化圏内に存する爲に表われた現象と解せられ、これ等を朝鮮製品とすることも一應許されるであらう。

(註) ① 金工の技術的面については現在京都で唯一の製作者と思われる溝口安太郎氏の示教をうけた所が多い。こゝに註記して謝意を表しておく。

② 「考古學雜誌」廿ノ十一口繪 この出土地は疑問で恐らく中國本土の出土ならん。

③ 關野貞「高句麗時代の遺蹟」下

四、年 代 考

中國・朝鮮・日本に於ける鍔帯が同じ範疇に入るもので

東亞に於ける鍔帯金具とその文化的意義(樋口)

あり乍ら、その受容の仕方を文化史的に眺めるとき、夫々の文化の特質なり、文化傳播又は借用の問題に興味ある事實を提供するものではあるが、それを敍べる前に考察の基礎的所作である年代決定を行わねばならぬ。

これには出土古墳の營造の時期が最も有力な據所となるが古墳の年代決定は色々考慮されるにも拘らず極めて困難な問題であつて、概括的な考定しかなし得ないことは已むを得ない。従つてこゝに推定する個々の年代もかなり幅のあることを留意せねばならぬ。絶對年代の第一のメルクマールは、副葬品中に紀年銘の存する事でそれによつて少くも上限は決定出来る。私もそれを出發點として進んで行きたい。

先ずA式では中國唯一の出土例である廣州大刀山の塚墓^Cがある。こゝから東晉明帝太寧二年(A. D. 324)の銘ある塚が出ており、四世紀中葉の營造なることが確言される。而してこれと同類を出した我が新山古墳の年代が梅原博士によつて應神・仁徳陵等の前方後圓墳盛期より遡ることが推定されているのと對比してほぼ相平行した年代たる事が考え

られるのである。次いで又ほゞ確實な年代の推定されるのは七観古墳で、これが履中陵の陪冢とおぼしき所から五世紀中葉にあてることが出来る。ひいてこれと同一品を出した月岡古墳が堅穴式石室に長持形石棺を有し、畿内の允恭陵と推定される津堂城山古墳、仁徳陵前方部の石室等の類例や、副等品(短甲・肩庇付冑等)の年代からほゞ古墳盛期に推定され、これ亦七観との平行年代が認められる。更に長持山古墳亦堅穴式石室に石棺のつてゐる點で盛期に屬するが、それが冢形石棺である所が上述の群より後出のものたるを思わせ、挂甲・杏葉・鏡板等の様式からして七観に相近いか又はやゝ下ることが考えられる。

次に又紀年銘を有して推定根據を興えるのはD型式である。即ちこの類の最も多く出土する新羅古墳の中に該當資料が二例存する。一つは一九四六年有光教一氏及び韓國學者等の手で發掘された慶州路西里壺杆塚^④で、こゝから罽底裏に「乙卯年國岡上甞開土地好太王壺杆十一」の鑄出しの銘を有する青銅壺が出た。高句麗中代の英雄好太王と乙卯なる干支から、A. D. 415年とさう紀年が興えられ、これによ

つて慶州積石塚の營造の一點が確立された。今一つは大正十五年の發掘になる同じ慶州の瑞鳳塚で、こゝから「延壽元年」「辛」「卯」の銘を有する銀盒子が出てゐる。たゞ之については「延壽」なる年號の不明なることから問題が残り辛卯の年を濱田博士の如くA. D. 511年とする以外に干支一運繰上げたA. D. 451年とも考えられるので、數多い慶州の積石塚が内部構造副等品共に類似する所から、いづれとも決し難いのである。ひいて同一形式のもので年代を六世紀後半以後の六朝末から隋代に推定する可能性が別に存するに於ては尙更であつて、今日新羅古墳の營造には五世紀以後二世紀余りのかなり長い年代を當てるの外なき實狀にある、然し壺杆塚をその古い例として既にD型式が存し、時代の下ると思われる金冠塚の頃まで通じて行われたことが考えられる。同じ型式を出した百濟の古墳が第二の主都公州から出てゐる事は、その熊津時代(A. D. 475—538)のものと同推定される點が之際留意されるし、高句麗の例亦平壤遷都(A. D. 437)以後であることも、上限を測する資料たりうるのである。同式の我國唯一の例である

飯塚概山古墳^①は横穴式石室と傳えられてゐるが、それが明かでないとしても伴出の副葬品からいつて先の年代に矛盾するものでないことも附記しておきたい。

以上の如き確實な紀年銘こそないが、相似た銘文によつて年代の推定可能なものにB式の江田船山古墳^②がある。石人を飾つた前方後圓墳内の横口式家形石棺から六面の漢式鏡をはじめ、短甲・冑・天冠・金銅履・金製耳飾等の大陸的色彩の強い文物と共に銀象嵌の長銘ある大刀が出た。それが福山博士によつて反正天皇代の作と認定され、これが事實とすれば、五世紀中葉の作となり、ひいては本墳の營造も亦これに相近い年代が當てられるようである。更に同じB型の京都殺塚は前方後圓形に堅穴式石室たること亦古墳中期の特色をもちながら副等品中に既に祝部土器の存すること^③は中期でも比較的下り五・六世紀の交にあたると思われ、愛知縣青塚と同様の特色をもち、鹿角装具を出しているが畿内以東という場所的制限を考慮に入れて又相近い年代が推されるであらう。

かくて爾餘の諸型式についても大體の年代は推定しうる

東亞に於ける銚帶金具とその文化的意義(樋口)

のであつて、例えばC式は月岡の年代から五世紀の存在は間違なく、E式は茶白山の年代不明としても百濟第二期公州地方のものであることから年代が推され、F式は先述のD式とほぼ同一の年代が考えられる。

以上の考察から東亞に於けるこの種銚帶の行われた年代が四世紀に始まり、五・六世紀に最も盛であることが判り、更に型式序列ではA式が最も古く位置することは文様技術の變遷推移の過程を分化退化的傾向に當てる根據たらしめてゐる。しかしして四世紀に單一型式であつたものが五世紀に至つて他の諸型式を出現せしめるが、その中龍文のあるA・Bは六世紀には早くも姿を消してしまい、D・Fのみが行われ、七世紀になるとこれらは總て衰えて、C式のみが長く唐・奈良時代に盛行するのである。

(註) ① 胡肇椿「廣州市西郊大刀山晉塚發掘報告」〔考古學雜誌〕
創刊號民國廿一年)

② 第一章 註3 參照

③ 第二章 註4 參照

④ 濱田耕作「慶州の金冠塚」昭和七年

⑤ 熊谷宣夫「わが古墳時代における佛教藝術の影響に關する一問題」(「佛教藝術」6、昭和二年)

⑥ 飯塚市樞山古墳については東京國立博物館の茶帳に圓墳、横穴式石室とあり出土品として帶金具・鍬先・鎌身・杵葉・帶鐵・斧頭・刀身・貝輪・砥石等を註記してある。

⑦ 梅原末治「玉名郡江田村船山古墳調査報告」(「熊本縣史蹟調査報告」第一冊)

福山敏男「江田發掘大刀及び隅田八幡神社鏡の製作年代について」(「考古學雜誌」廿四ノ一昭和九年)

⑧ 梅原末治「松尾村殿塚」(「京都府史蹟勝地調査會報告」第二冊 大正九年)

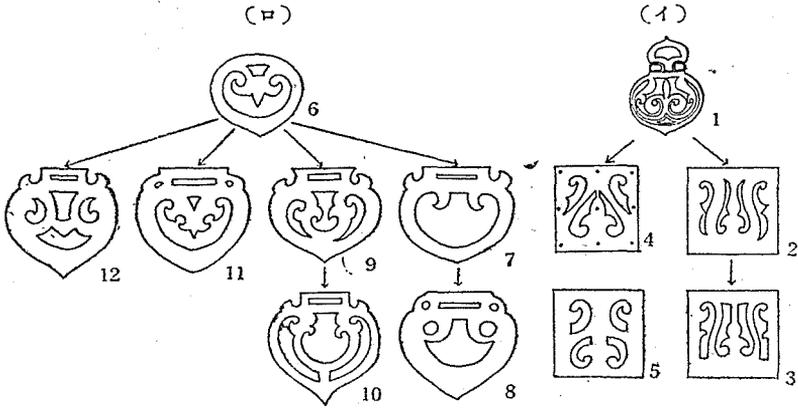
五、文 樣 考

— 附中國に於ける龍文の發達 —

銚帶の型式及び年代を一應整理した吾々は愈々最も複雑な文様の考察に入ることとする。先ず文様は主題によつて三つに別けることが出來よう。

(一) 唐草系文 D式及A式の垂飾に存するもので第一圖No.6の如く疑問符形を四個打抜いたのをその典型とする

が、瑞鳳塚出土品(第二圖No.7)をみると、中央下邊に上向の三葉文が認められる。この三葉文はA式(第一圖No.3)に基本形があり、之を盛に應用した鑲頭大刀では樂浪出土品まで遡りうる。一體中國に於て植物文様は六朝以後に盛行したと云われるが、漢代既に存在したことは、梅原博士がノイン・ウラ出土の織物文や樂浪出土漆器文によつて證明された所^①で、これらが勿論スキタイを通じて西方植物文の流れを引くものであるとしても、鑲頭大刀の三葉文の如きは中國的に消化された二次的所産であるという風に考えられぬこともない。従つて鏝板の唐草文亦その傳統を受けたと云へるが、同じ銚帶で西方バルカンのアルバニヤ出土品中に第一圖No.1の如き三葉文を見るのである。中央に三葉バルメツトがり、莖が左右に兩分して上向いた半バルメツト風の尖端となり中央三葉文を兩側から圍んでゐる。之はD式の唐草文の兩側又は上方に透彫された疑問符形の原形をなすもので、これから變化して行く次第が第二圖(イ)の如く容易にたどれるのである。而も之が同じ銚帶の文様である所から先にあげた鑲頭の三葉文よりも近親性を



第二圖 唐草系文様變遷圖

- | | |
|-------------------------------|------------------|
| (1) Albania (Strzygowsky) | (4), (12) 瑞鳳塚 |
| (2), (6), (7), (8), (9) 慶州金冠塚 | (5), (11) 昌寧八九號墳 |
| (3) 宋山里一號墳 | (10) 月岡古墳 |

もつのであり、ひいてD式鍔板唐草文は西方傳來の鍔板に附隨していた文様をそのまま採用し變形退化させたので、中國的新要素は加へられてない見えるのである。

尙お心葉形垂飾にみる多様な唐草文も同圖(ロ)の如く三葉文からの變遷がたどられる。唯この際かゝる變遷過程から編年の序列をたどり得ないことは、金冠塚出土品中に基本形・發展形・崩形が同存していたり、比較的時代の廻る靈杆塚や飾履塚のものが崩形を示していることによつて理解出來よう。

(二) 獸首面 之はE式の三例のみであるが獸の口を開いたものと閉じたものとある。獸面亦中國に於て辟邪の意から古くより愛用せられた圖文である。

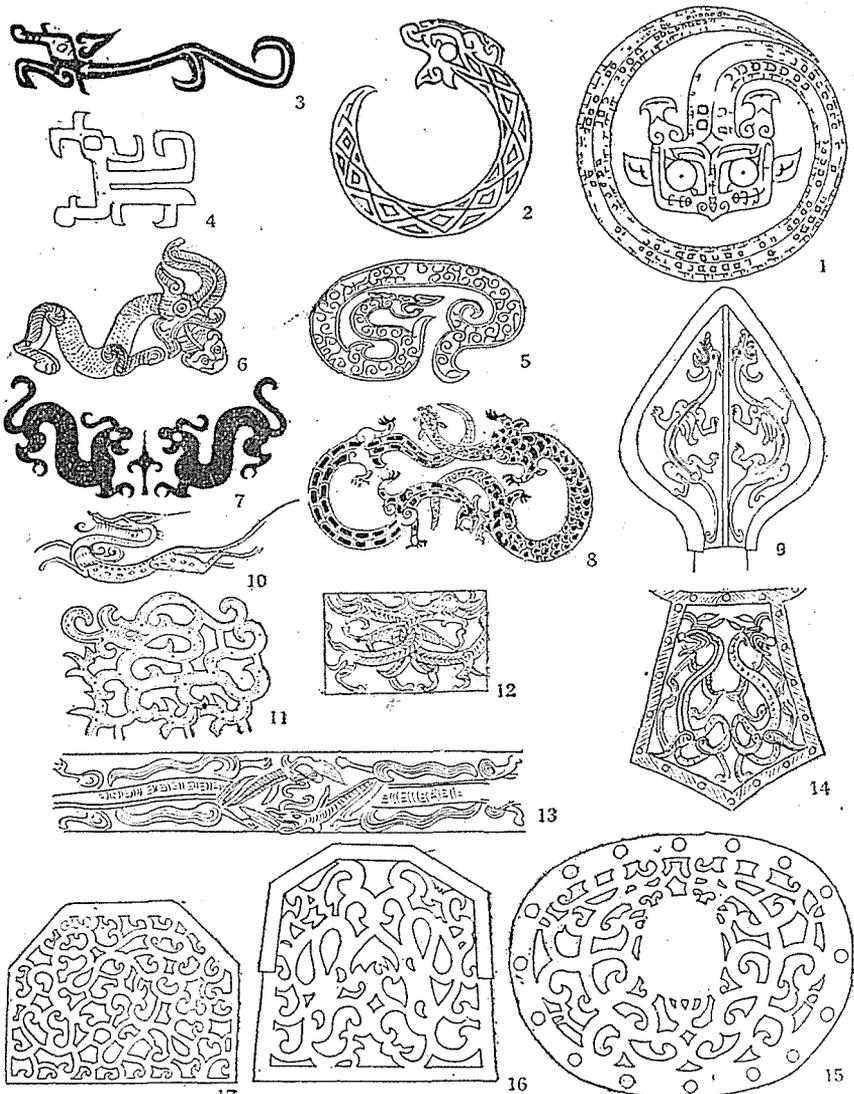
(三) 獸形文 鑄帶文様中最も特色のあるのはこの種のもので、A・B二型式にあり、中國出土品(第一圖NONI No.2)には龍・虎・鳳という四神中の三獸が描かれているが、他は殆ど龍文である。最も精巧な中國出土品から龍の形をみると、左向きの側面形であるが、頭部は四分の三正面向きに描かれ、大きな開口、角、耳、S字狀に曲る軀體

三爪と距とを有する四足、長尾、それに翼までが細密な毛彫りで表現され、鳳凰、虎亦同様の手法である。次の七觀の古墳の例(No4)になると、それ程の精密さはないが、同じポーズで肢體の各部は未だ認知せられ、唯各部尖端が渦状をなして唐草文化する傾向を既にあらわしている。B型式のものになるとA式程の精巧さは更にはないが、表現が薄肉刻である爲に、立體觀を増し、七觀の如き崩形化は少い。唯この類ではポーズに違つたものが認められ、穀塚鏡板の如き側面形の外に、同垂飾(No7)にみるような双龍が四肢を兩側に出した俯瞰的展開形、更に愛知青塚(No5)の如く展開形の舛に首を反轉させたり、江田船山(No3)の如く、鏤狀の舛軀の中に首を突込んだような所謂旋轉形のものがある。

一體龍は中國的空想の所産ではあるが、超經驗的靈獸として古くよりこの國の精神界に支配的役割を占め、それを具象化した圖形は凡ゆる方面に賞用されて矢張り文藝界の王者として君臨していた。所がこの龍の本質に關する研究は二三發表されているが、龍文については多數の資料が存

在するに拘らず未整理のままに終つてゐるといふ現状である。勿論その考察は中國文物の跛行的遺存例からして、その變遷を辿るのは容易ではない。従つてこゝでは粗略ではあるが鈿帶龍文に關係ある範圍に於て本文様の變遷を一應たどつてみたい。

扱て中國に於ける最古の獸文は何といつても三代古銅器のそれに指を屈せざるを得ないが、饗養文^{トウヤウ}鳳文等と共に奇古なる龍形の文様として彫龍文^{キョウリウ}變龍文^{ヘンリウ}の二つが挙げられる。勿論その名稱は後世のものであり、これ等の圖文が果して當代中國人の精神世界に考えられていた龍の圖象化であるかどうかは明かでない。畏友岡田芳三郎先學の教示によれば殷代甲骨文に出てくる「龍」の形と一致する圖文としては白陶蓋上面にある鏤狀蛇形のもの(第三圖No3)が考えられる。更に銅洗の内面等によくある類似の環身形の怪獸文(No1)は同じ龍文の俯瞰形といえるであろう。従つて本來龍の圖象化されたものはこの種の蛇形のものであつたようであるが、先述の虺龍(No3)、螭龍(No1)の兩文も當代人の考える龍ではないにしても、後世龍文發展の



第三圖龍文の變遷

- (1) 青銅盤内底文様
 (2) 甌形白陶蓋上文
 (梅原博士「河南安陽遺物の研究」)
 (3) 青銅篋外側文様 (容庚「商周彝器通考」)
 (4) 青銅軛頸部文様 (Buckingham Coll.)
 (5) 金村出土帶鈎嵌玉文 (梅原「洛陽金村古莖聚英」)
 (6) 透彫飾金具文 (梅原「支那古銅青華」)
 (7) 青銅壺沈文 (梅原「戰國式銅器の研究」)
 (8) 金村出土鏡金銀錯文 (梅原「前掲書」)
 (9) 銅矛鏽出文 (瑞典皇太子所藏品)
 (10) 漢代銅鏡象嵌文 (ルビ氏コレクシオン)
 (11) 應神陵陪家出土金銅鞍金具透文様
 (12) 蓋杆塚出土銀頭太刀把部上緣文 (13) 滋賀水尾古墳出土銀頭太刀銀頭周緣文 (14) 飾履塚出土金銅香葉文 (15) 宮崎縣百塚原出土金銅鏡板文 (16) 瑞鳳塚出土金製腰環形垂飾 (17) 金冠塚出土同類文様

上に基本的形制となつたことは考えられる。これ等多種多様な形態を通観すると殷周代の龍文には劃一性がなく例えば環狀龍文一般には無足の蛇形ではあるが、足を有する例^①も存し、又虺龍文夔鳳文には有翼隻脚を呈するなど、龍文としての定型化が見られない。しかし乍らその間に於て表現形式には後世にみる側面的・俯瞰的・旋轉的三型式の祖型的なものが認められるのである。

この傾向は周代を通じて行われるが、周末の戰國式銅器になると様相が一變する。殷周の怪奇なる浮彫文は消えて平面的手法の全く違つた作風のものあらわれる。そして龍的獸文としては諸銅器器體の地文をなす蟠螭文や嵌玉帶鈎の透彫龍文(No8)の如く前代の形を襲つたものの外に、全く違つた形式のものが新たに産れてきた。即ち第三圖(No6—No9)の類でこれらは四足獸的表現をとつてくるのである。一體戰國式なる様式が所謂スキタイ文化の影響によつて出現したことは一般に認められてゐる所で、No7の如きはスキタイの絡んだ動物モチーフに極めて近く、これ等が採用せられて龍をも相似た四足獸として表現するに至

つたものである。更に表現型式としては前代同様の三型式があり、側面形ではNo8や環龍文^②のそれがあり、俯瞰展開形ではNo8No9の如き双獸形が既にあらわれて以後の時代にそのままの形式が傳えられている。

かくて戰國時代にスキタイ動物文の影響から四足獸としての形體を得、次第に定型化されて行き漢代に至つて完全な龍文が確立された。所が當時の龍文は四神の一という思想的內容をもつた圖象として表わされることが多く、No10の如く純粹な裝飾文として龍文文が應用される事は比較的に少なかつたのではないかと思われる。龍は天子の象徴であり龍文の如きは濫りに一般庶人の使うことを許さなかつたという言傳えも案外この邊の事情を物語るのかもしれない所が六朝代になると急に純粹裝飾文としての龍文が増加してくる。然しこの時代は中國自體の關係資料に甚だ乏しく、ひいて朝鮮・日本の當代古墳の副等品中鏝頭大刀・馬具・腰珮等に施された龍文を以て推す外はないのであるが、これらは本論主題たる銜帶金具と同じ手法をもつ一群の遺物たる點で、この際特に取上げらるべきである。

こゝにも亦三つの表現型式が考えられる。第一の側面形としては應神陵陪家丸山古墳出土の金銅透彫鞍金具、慶州金冠塚・瑞鳳塚及昌寧校洞古墳出土腰珮、銀鈴塚・金冠塚・達城郡第五十號墳出土の透彫杏葉等を擧げることが出来る。

いずれも透彫りに毛彫を加えているが、丸山出土の鞍金具龍文(No.11)最もよく各部の形態をとゞめ、上顎と下顎を上下に反轉させるその間から長舌を出し、頭上には波狀にうねる角があり、軀體はS字狀にまがり、三爪を有する四足の狀態は最も七觀古墳出土の鏡板龍文に近い。所が瑞鳳塚出土圭形垂飾(No.6)になると、次第に各部の特色が失われてき、金冠塚の圭形飾文(No.17)では頭部が丸く残つてそれとみとめられる以外は全く唐草文化してしまい、各部を明瞭に區別し難きまでに崩形化されているのである。

次に俯瞰展開形は飾履塚や日向西郡原出土の杏葉・鏡板や、壺杆塚、水尾古墳出土の双龍鑲頭太刀及金冠塚出土兩脚形鑲飾等にもみとめられる。ポーズはいずれも双龍を相稱的に配し、頭は側面形をとるが軀體を平面的に展開してあらわしているのが特色である。而して、飾履塚のは(No.

6)龍形よく残り、前代のNo.6に近い趣をとゞめているが、鑲頭上面文様(No.3)の如きは既に形式圖案化され、西都原の鏡板(No.15)亦唐草文化していつ、こゝにも側面形と同じ變遷過程をみとめるのである。この特色は旋轉形のもの(No.12)でも言えるのであつて通じて、各型式の夫々の龍文が次第に退化崩形への道をたどつていくことが認められるのであらう。

かくて中國を中心とする裝飾文としての龍文の變遷を股代から六朝に亘つてたどつたのであつたが、その間に於て本題の鑲帶の龍文はいかに位置づけられるであらうか、それは製作技術から龍文自體の變遷過程に至るまで所謂六朝代の馬具・鑲頭太刀・腰珮等の一群の遺物と全く範疇を一にするものであり、これ等と共に構成する文化複合體として意味づけらるべきである。更に文様自體では側面・展開・施轉の三型式が、實は中國に於て古くから進じて使用された傳統的表現型式をそのまま襲用したものであることが解る。更に文様からする年代の考定は出土古墳からの推定と一致するものであることも亦こゝで注意される。例え

ば七觀古墳を同一手法の龍文をもつ鞍金具が應神陵陪家出土であることや、江田、青塚等の施轉形が五世紀後半の水尾古墳出土銀頭太刀柄部文様に一致するが如きはこれらを證して餘りある。

以上東亞諸地域の銚帶文様について眺めてきたが、更にこの特色を本質付け、かゝる文様が採用された所以を知るには、北方文化圏に於けるその文様との比較がなされなければならぬ。然しこれは亦極めて大きな問題で、此處に詳述することは許されない。唯概括的にのべるならば、ハンガリー等の遺物（第一圖16—19）にみる銚帶の文様も同じく植物系・動物系二種が存した。而して植物系では前述の如く西方のものがその儘東亞に傳えられているが、動物文の方は牛・羊・鹿の如き實在的動物が蹠踏咬合の特殊なポーズをした所謂スキタイ風の動物文に屬する。このポーズが同じスキタイの影響で定型化された中國の鬮様の龍文に極めて類似していた。そこに彼等が銚帶を受け入れた際、直ちにこれによつて置換えたと考えられ、唐草文の場合と對照的様相を見るのである。

〔註〕①梅原末治「漢代の植物文様について」〔古代北方系文物の研究〕所收

・尙ほ中國植物文については長廣敏雄「北魏唐草文様の二三について」〔東方學報〕京都第八冊）參照

②Strzygowsky: *Altai-Iran und Völkerwanderung*, 1917

③那波利負「支那龍傳説考」〔東亞攷究會會報〕三

出石誠彦「龍の由來について」〔東洋學報〕十七ノ二

白鳥清「龍の形態についての考案」〔廿一ノ二〕

伊東忠太「龍文に就いて」〔考古學雜誌〕三七ノ二

④容庚「商周彝器通考」附圖八二五

⑤梅原末治「戰國式銅器の研究」圖版七七

六、結 語

以上吾々は銚帶について形式と文様の二方面からの考察を行い、兩者の結論の相一致することを證し得たのであるが、最後に之を一文化要素として果した役割を眺めてみたい。騎馬民族の服飾具として北方文化圏内に誕生した銚帶が東漸して東亞文化圏へ傳えられたとき、彼等は革帶の面を飾るという機能的本質に於ては變えられることがなかつたが、それに施された文様なり、器形は決して一様を受容の使方や變化發展をしたのではなかつた。先ず中國の場合

からみると、西方から初めて傳えられてきた時、彼等はそれを流れ入るまゝに總てをうけ入れたのではない。その中から動物文のもの文を採用した。それは勿論動物文を偏愛する彼等の本質的觀念に基いたもので、その趣好にアツピールするものを選択したのである。その態度は單に受動的ではなくて、寧ろ積極的に外來文化を借用したのである。而して一旦受入れるや、彼等の趣好範圍内にあつた動物文を更に自分自身のものに置換えてしまつたのである。かゝる變革は受入れる側のものが自らの文化を獨目に確立させ、發展させる文の潜在力と地盤をもつていたからであり、自國の文化に對する信頼と誇りを有するものにして初めて可能なのである。

然らば朝鮮の場合はどうであらうか。こゝでは中國で受入れなかつた植物系の文様を採用し、多様化して行つた點で中國と異なる獨自性を認めることが出来る。然し朝鮮獨自の植物文を持合はさなかつた爲に輸入のモチーフを變える迄には至らなかつた。唯問題は龍文系の存しないことである。彼等が中國人に反して植物文のみを採用したとは思われない。その上朝鮮の文化が中國の影響下から離れて、自立出來たとも思えないし、龍文にしても別の馬具や腰佩には中國の傳統的表现形式をもつたものが多數存在するので

ある。しかるに龍文の鈔帶文様が全くみられないといふのは大きな疑問として残るであらう。最後に日本は如何、最も多種多様な形式を包含する點で兩者に勝るものではあるが、それらは既に考證せし如く總てが船載品とみなされる特色を持つてゐる。そこには何等日本の要素はみられない。それは當時の日本が文化的に全く大陸に依存し、それからの絶えざる刺戟によつてのみ自國文化の向上をはかり得た状態を物語るようである。文化の傳播という一文化現象も、その荷擔者である兩文化圏の質的歴史的差異によつて様々な様相を呈することをこの簡單な遺物の在り方から知ることが出来るであらう。更に鈔帶が極めて特殊な文物であり乍らもそれ文で獨立した存在意義を有するものでないことが、銀頭太刀・馬具・腰佩等の一群の遺物と共通した手法・文様を有することで指摘され、これら多數の文化要素の有機的複合體として、彼等の屬する本來の文化―北方狩獵民の文化―が豫想されることも、又文化的考察の一助であらう。かく見かく説き來るとき、吾々の取り上げた些細なる一片の小金具も大きな全體的文化の所産であり、その背後に荷う文化の歴史を展開しうるのであるが、本論ではその基礎的操作である器物自體の本質を究むることとゞめたい。